

あ い さ つ

関東甲信越放送・視聴覚研究大会

長野大会会長 桂本 和弘



南アルプスと天竜川に生まれ、豊かな自然、美味しくて素朴・体に優しい豊かな食文化が育ち、また、「民俗芸能の宝庫」といわれるように、地域の人たちによって守り伝えられてきた伝統文化が、今もたくさん残っているここ下伊那の地で、第57回長野県視覚・放送・情報教育研究大会 下伊那大会が盛大に開催できますことは、大変光栄であり、ご来賓を含め、関係各位全ての皆様に、心より感謝申し上げます。

本大会の研究主題「教育メディアを有効に活用し、一人ひとりの子どもに確かな学力を身につけ、心豊かな人間性の育成を目指す」の元、管内6校の授業公開と県下各地の先生方の実践レポートを基に、充実した研究協議の時間が持てましたことに感謝申し上げます。それぞれの授業会場では、ICT 機器を積極的に活用することで、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業実践を通し、すべての子どもたちの可能性を引き出す学びの実現に向けた一人一台端末の有効活用について、提案性のある授業を数多くみることができました。大勢の参観者が、子どもたちの追究を見つめ記録をとり、授業について学び合う本県ならではの研究会でもあり、大変うれしく思います。また、分科会においても、発表レポートを基に、教育メディアの効果的な活用と ICT の果たす役割について、活発な議論が展開されておりました。さらに、番組研究会においては、教育メディアがどう効果的に活用されたのか、ご参会の皆様により活発な議論が展開されました。

また、午後は、一人一台端末の導入により子どもたちの学びがどう変わったのかに焦点を当てた、信州大学名誉教授 東原義訓先生と5人の先生方による「私たちのGIGA実践：GIGAスクールがもたらした学びのBefore&After」と題したパネルディスカッションが行われました。単なる成功事例の共有ではなく、私たち教師が抱えている不安を払拭してくれる具体的なアイデアがふんだんに盛り込まれ、参加者にヒントや勇気を与える時間となりました。

さて、5月に文科省から話を聞く機会がありました。その中で、GIGA スクール構想においては、デジタルの力でリアルな学びを支えるという基本的な考えに立ち、適度に賢く使う、適切かつ多様なベストミックスが大切であるという話がありました。背景には、日本の子どもたちは、他国に比べ、ネット情報の信頼性についての確認の割合や偽・誤情報の認識率が大変低いことが挙げられていました。このことは、端末である事柄を検索した時に、その情報が全てだと思い、疑うことなく自分の意見として伝えている子どもたちがいるのではないかと、情報の真偽についても吟味し合い、思考を再構成する学びが必要ではないかということを示唆しているように思います。事実、ICTが馴染んだ教室では、紙かデジタルかを子どもが決める、画像検索でイメージを膨らめる、クラウドで共有し全員で真偽を検証するというデジタルの強みを上手く活用している教室が増えてきていると文科省は言っています。

本県でも、午前の授業のように素晴らしい実践が積みあがってきています。今後、本研究会での研究が、広く県下の教職員に周知・伝達され、教育メディアの効果的な活用が一層深まり、有効性を感じることができると願っています。

結びとなりますが、日頃の研究・実践を基に、公開授業や実践レポートを提供して下さった先生方、授業研究会・番組研究会の運営にかかわって下さった先生方に改めて感謝を申し上げます。また、大会の諸準備・運営に際し、様々なご配慮をいただいた滝沢勇一下伊那大会推進委員長をはじめ、下伊那地区の視覚・放送・情報教育研究会の役員の皆様方をはじめとする関係の皆様は心より御礼を申し上げ挨拶いたします。